

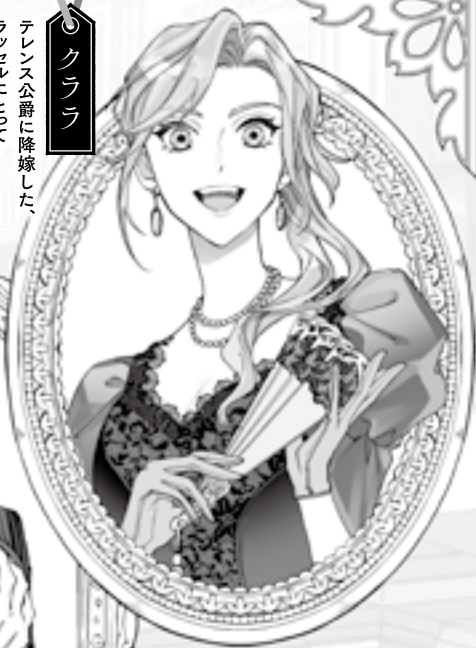
美貌の王立図書館の副館長は

健康のためにドラゴンを飼うことにした

✧ Characters ✧

クララ

テレンス公爵に降嫁した、
ラッセルにとって
頭の上がない姉。



ハーバート・ローレンス

子爵で、現王家とは
長年友人付き合いをしている。



ロイ

ドラゴン専門店（竜のヤドリギ）の店主。
ドラゴンを溺愛してるルークに対して
小馬鹿にしているような
様子を見せる。



ルーク・セクストン

王立図書館の謎多き副館長。
その美貌からひそかに図書館の「いとし子」と呼ばれている。
ドラゴンのリリを溺愛している。



リリ

ルークがサフスクした
ドラゴン。
名付け親のルークが大好き。



ラッセル・S・ウィンズレット・アルドレイク

アルドレイク王国の第七王子で、王立図書館の館長。
現王の末っ子だが甘やかされてはおらず、面倒見がよく責任感も強い。



目次

プロローグ

7

第一章 図書館のいとし子

12

第二章 ドラゴンの卵

46

第三章 竜のヤドリギ

97

第四章 ルーク・セクストンの秘密

128

第五章 アルドレイク王国の冬

162

第六章 古代遺跡の冒険

205

第七章 ルークの宝石

249

エピローグ

296

プロローグ 王立図書館の副館長による早朝のドラゴン散歩が人々を驚かせた件について

王立図書館の副館長がドラゴンの定期飼育^{サプスク}をはじめたとき、王都の一部は大いにざわついた。最初に気づいたのは配達人たち、それにコーヒースタンドの亭主だった。

アルドレイク王国の王立図書館は大学街の中心にあり、街路では早朝から、ミルクやパン、新聞の配達人が朝寝坊の教授や学生の目を覚まさせようとしている。コーヒースタンドは大学街の中央と端、つまり図書館と学寮の前に一軒ずつあり、そのどちらの店の亭主も、かの人を目撃した。

副館長は背筋をまっすぐ伸ばしたまま、まだ学生も教授もない街路をぐるりと回ると、図書館の通用門へ戻っていった。ひとりの配達人はコーヒースタンドに駆け寄り、黒髪を背中に垂らした副館長のうしろ姿を目で追いながら、亭主に話しかけた。

「ちょ、ちょっと。あの、あれ……あそこにいるの、ルークさんですよ？」

亭主は小声で言い返した。

「そんな馬鹿な。あのルークさんがこんな時間に図書館の外へ出てくるはずが——」

「でもそこ通ったじゃないですか！ それに見て、あれ」

配達人は通用門へ入っていく副館長の頭上を指さした。

「ルークさんの頭の上を飛んでる生き物！ ドラゴンよ！」

「……つてことはまさか……」と、亭主は声を震わせる。

「ルークさんは〈竜のヤドリギ〉に行つたのか！」

〈竜のヤドリギ〉は一年前、王都の胡桃通りのはずれに開店したドラゴン専門店だ。以来、アルドレイク王国の貴族階級や上級官吏のあいだではドラゴンを飼うのが大流行している。紳士淑女が草紐でつないだドラゴンを肩にとまらせたり、頭上でばたばたと羽ばたかせたりしながら大通りや公園を散歩する光景は、いまやそこまで珍しいものではない。

しかし、大学街にドラゴンを連れてくる者はいなかった。しかもそれが王立図書館の副館長、ルーク・セクストンとなると――

「まさか、ルークさんがドラゴンを飼いはじめるとは！」

「図書館の妖精とまでいわれるお方が、ドラゴンの散歩のために外に出た？」

「どういう風の吹き回しで？」

配達人とコーヒースタンドの亭主は息の合った感想をつぶやき、顔を見合わせて苦笑いした。そのころにはもう、王立図書館の副館長ルーク・セクストンは図書館の重厚な建物の中に消えてしまっていた。

ドラゴンはアルドレイク王国に古来より生息する、トカゲに似た生き物である。生き物と言っているが、実際は人や鳥や獣の類ではない、精霊族の一種だ。形はトカゲに似ているが体は温かく、翼を広げて小鳥のように空を飛ぶ。成長しても小型の犬か普通サイズの猫くらいのもので、鳥のようにさえずることもないし、昔話の巨大な竜のように火を噴くこともない。

ドラゴンはアルドレイク王国の象徴でもある。主たる生息地は湖をかこむ王領の森といわれ、ここでは捕獲は禁止されているが、王家は臣民がドラゴンを飼うことを禁じてはいない。翼をもつ存在だから、実際は森の外にもかなり多く生息していると思われる。王領の森ですら人間の前に姿をあらわすことはまれだが、気に入った場所や人間には懐くとも言われている。実際に、田舎ではたまに農家に住みついている個体があって、その場合は幸運のしるしとして大事に飼われていた。

ペットとして飼われているドラゴンには、新鮮な卵の殻を毎日最低一個は与えなくてはならない。朝露が好物だから、飼い主に懐かせようと思ったら、晴れた日の朝は早起きして外を散歩させ、朝露を舐めさせるのも忘れてはならない。

ドラゴンの体色は赤、青、黄色、緑、黒とさまざまで、斑や縞柄といった模様がある個体もいる。時々、珪砂や鉱物の結晶を与えると体色がきれいになる。

これらは〈竜のヤドリギ〉が配布する『ドラゴン飼育マニュアル』に書かれていることだ。王都でドラゴンをペットにしたければこの店に行くしかない。

ただし、この店からドラゴンを連れ帰って散歩させている人々は、ドラゴンを所有しているわけではなかった。〈竜のヤドリギ〉の店主はドラゴンを売らないのである。ドラゴンは精霊族の一種、本来なら森や湖のような自然を好む種族だから、王都の人間には売ることはできない、と言うのだ。そのかわり〈竜のヤドリギ〉ではドラゴンを月単位で貸し出している。定期飼育権の料金は安い

とは言えず、ドラゴンに与えるために、クリーム色をした特別な鶏卵の定期配達も同時に契約せられることになり、庶民はややためらう値段になる。しかし貴族が社交に費やす金額にくらべれば、たいしたことはなく、上級官吏のふところが痛むほどでもない。

結果として〈竜のヤドリギ〉は大繁盛していた。流行が流行を呼んでいるわけである。

だからって、王立図書館の副館長、ルーク・セクストンがドラゴンをサブスクしたって？

それはあまりにも驚くべきことで、コーヒースタンドの亭主や配達人たちは黙っていられなかった。一番にコーヒーを買いに来た学生や、新聞を受け取りに外へ出た教授に彼らはこの一大事件を話し、ニュースはあつという間に大学街一帯に広まった。王立図書館には王宮の官吏も頻繁に出入りする。そのためこの話題はその日のうちに王宮にも届き、一部の人々をざわめかせた。

それは、毎日副館長に接している図書館職員たちも例外ではなかった。

「副館長、どうしてドラゴンを飼うことにしたんですか？ 散歩とか大変じゃないですか？」

好奇心を抑えきれなかった職員がついに問いかけると、ドラゴンを肩に執務室へ入ろうとしていた副館長はかすかに眉をあげた。

「健康のためです」

意外な答えにたずねた職員は思わず口を開け、同じ言葉を繰り返した。

「健康のため？」

「館長に指摘されたのです。私は図書館に引きこもりすぎで、それは健康に悪いと」

副館長の言葉は石の回廊に冷たく響きわたり、執務室のドアはいつもよりやや大きい音を立てて

閉じた。

外に残された職員たちは思わず顔を見合わせた。

「引きこもり？ 館長と今度はどんな喧嘩を——」

「しっ」

「聞かぬが花だぞ」

職員たちの声は自然に小さくなった。王立図書館の館長にしてアルドレイク王国第七王子のラッセルと、副館長のルーク・セクストンの関係に問題があることは、彼らには周知の事実だった。

第一章 図書館のいとし子

1 誰が見ても美しい男、ルーク・セクストン

アルドレイク王国の王立図書館は歴史のある古めかしい建築物である。王都にある王宮や貴族の邸宅のような華麗さはみじんもないが、見る目のある者にはすぐにわかる、謙虚な美しさをたたえている。

その王立図書館の副館長であるルーク・セクストンは、誰だろうとひと目でこの上なく美しいと思う男だった。

すらりとして均整のとれた肢体が図書館の中庭を歩くと、誰もが吸い寄せられるように彼を見てしまう。遠目にも美のオーラを感じられる背中には絹糸のような黒髪が流れ、きめ細やかな肌は内側から光を放っているようだ。

たいていの場合、桜色の唇はきりりと結ばれていて、青い月夜の色をした眸ひとみはここにはない何かに集中している。並みの人間なら「ぼうっとしている」と思われそうな場面であっても、ルークの場合は深遠な物事について思索をめぐらせているにちがいないと思わされるのだ。そして職員や知ち己き

が声をかけると、ルークはハツとしたように振り向いて相手をみつめる。長いまつ毛の影からは人を撃ち抜くような色気があふれ出ている。

といつても、本人には相手をそんな気持ちにさせている自覚はない。副館長と話した人間は秒で理解するのだが、ルークは人間の外見にはほとんど興味がなかった。自分がその容姿ゆえに注目されることに無頓着である。図書館の職員たちは、そんなルークを折々に鑑賞するのを、勤務中のひそかな楽しみとしていた。

しかし今日、図書館の中庭を横切っていくルークは、いつものように遠くの何かに集中している様子ではなかった。その注意は自分の斜め上を飛ばたくドラゴンに向けられている。

まだ育ちきっていないドラゴンのようで、その胴体はルークの手のひらより少し長いくらい。胴から尖った尻尾までは濃い青色で、翼の表面は空色、裏側は純白で、その中に稲妻のような黄色の筋が走っている。

ドラゴンがルークの腕めがけて舞い降りてきたので、彼はその場に立ち止まった。ドラゴンをつめるルークの唇にはうっとりとした笑みが浮かんでいる。

「リリ、朝の散歩はどうだった？ 朝露はもう十分かな？」

ささやきかける声は、図書館職員の誰ひとりとして聞いたことがないにちがいない、優しい響きを帯びている。

ドラゴンはルークの手首にちゃんとまり、藍色の目で飼い主をみつめた。眸の中心には輝く白い星がある。ルークは指先でその頭をそっと撫でながら、ドラゴンと自分の両方に言い聞かせるよ

うに「そろそろ仕事をはじめなくては」と言った。すると羽根がパツと開き、抗議するように鉤爪がルークの袖をひっかいた。

「籠^{かご}に入りたくないのか？ でも仕事中は遊んでやれないんだ」

ドラゴンは尻尾でルークの袖を叩き、いやいやをするように首を横に振った。でもルークが「仕事中也一緒にいられるように、執務室に籠を届けさせたんだよ」と言ったとたん、空色の翼をたたくで澄まし顔になった。藍色の目の中心で白い星がきらめく。

ルークは思わず微笑んだが、それは子供のような無邪気な笑みだった。

「私が仕事をしているあいだ、じっとしていられるって？ ふふ、まずは執務室へ行こう」

ルークが腕を動かすとドラゴンは鉤爪をゆるめてぴよんと飛び、今度はルークの肩にとまった。そのまま執務室へと回廊を歩いていく。

空色の翼のドラゴンと副館長のうしろ姿が完全に見えなくなったとたん、中庭や回廊のあちこちに隠れていた人々がふーっと息をついた。

「今の……見ました？」

「見ました」

「副館長×ドラゴン……なんて破壊力」

職員たちがひそひそと話しはじめる。さつきからずっと、声をあげそうになるのをこらえていたのだ。

「おれ叫んじやいそうで口を押さえてましたよ」

「ね、あのドラゴン、リリちゃんっていうんですね」

「ああ、わたしリリちゃんの爪の垢^{あか}になりたい！」

「おれは籠の敷き藁^{わら}でいいです」

「止まり木でもいい。あの鉤爪にひっかかれない」

「え、何があったの？ みんな大丈夫？」

「え、副館長のあの顔を見損ねたんですか？ 寿命が十年はのびたのに」

ルーク・セクストンは職員のあいだで公平な人物として知られている。物腰は柔らかで声を荒げることもしない。しかし、今しがたドラゴンに向けられた無防備な笑みは、これまで誰ひとりとして見たことのないものだった。

そのときである。興奮さめやらぬ職員の背後から、よく通る声が響き渡った。

「何があったんだ？ そんなところに集まって」

全員がハツとしたようにそちらを向く。

「あ、館長！」

「おはようございます」

「おはよう」

職員たちの背後で腕を組んでいるのは館長のラッセル。蜜色の髪に琥珀色の目をした王家の末の王子である。三カ月前、前館長が高齢と病弱を理由に退いたあと王命で館長に就任した。

ラッセルは堂々たる体躯の美丈夫^{びじょうぶ}で、細身ですらりとした美貌のルークとは対照的な外見である。

学生時代から剣技に秀でていることで知られ、騎士にもひけをとらないと言われていた。王家の末子に生まれなければ、今ごろは騎士団で実力を発揮していたことだろう。

しかし、現在のアルドレイク王国では、王立図書館の館長は王家の末の王子の役職とされている。有能無能にかかわらず、歴代館長は末の王子が務めると法で定めているのだ。

ちなみに、ルーク・セクストンが副館長となったのも、ラッセルと同じ三カ月前のことである。

ルークは前副館長の補佐を務めており、前館長と同時に退職した前副館長のあとを引き継いだのだった。

「おはようございます。その、副館長が……あ」

副館長と聞いたとたんラッセルの声は少し低くなった。うっかりルークの名をもらしかけた職員がハッとして口をつぐむ。

「なんだ？ ルークがどうした」

ラッセルは怪訝な顔をした。

「あ、いえ、その……なんでもありません」

「何を言っている、ルークが何かやったのか？ なんだ、そのぼうつとした顔は」

「これはその……館長もあれを見たらぼうつとしますよ！」

「だからルークに何があったんだ」

思わず声を大きくした職員にラッセルは畳みかける。職員は不安になった。副館長が執務室にペットのドラゴン連れこんだと聞いたなら、館長はどう思うだろう？

図書館内部に動物を連れてくるのは禁止されているが、職員が働くバックヤードは、見守りの必要な赤子や動物を同伴することは許されていた。書庫など、連れていけない場所はあるものの、副館長の執務室はどうなのだろう——？

「副館長はドラゴンと朝の散歩をしていました！」

「ドラゴン？」

思い切って答えた職員にラッセルは驚いた顔を見せた。それを皮切りに、他の職員たちも次々に声をあげはじめる。

「そうなんです、〈竜のヤドリギ〉のサブスクドラゴンです！」

「名前はリリちゃんです」

「副館長、ドラゴンに微笑んでいたんです。そ、それにドラゴンを撫でてました」

「可愛くて神々しくてお腹いっぱいな感じで」

「館長も見たらよかったのに！」

「わかった、わかった——静かに」

ラッセルは手をふって職員たちをしずめた。

「それでルークはどこに？」

「あ、その……執務室へ行きました」

「ドラゴンを連れて？」

「あ、はあ、たぶん……」

「わかった。おまえたち、仕事しろよ」

職員たちは声をそろえてハイ！と答え、ラッセルはルークと同じ方向へ歩いていった。職員たちはラッセルの蜜色の髪が見えなくなるまで黙って目を見交わしていたが、実は全員、心の中で同じことを思っていたのだった。

——館長と副館長、また喧嘩しませんように。

2 館長と副館長の関係についての一般的見解

王立図書館館長のラッセルと副館長のルークの関係は穏やかとは言えない。それどころか陰悪な部類のようだと、職員たちはずっと前から察している。何しろルークはラッセルと向かい合っているときだけ、いつもの落ちついた態度を崩して、冷淡でそっけない、あるいは不機嫌で苛立った表情を見せるのだ。

つい先日、ラッセルとルークは中庭を囲む回廊で二歩の距離で向かい合っていた。石の壁の陰には職員が隠れ、ハラハラしながら成り行きを見守っていた。

「先月も申し上げましたが、御前会議に出席するのは館長おひとりです。副館長の私が行く必要はありません」

「先月は改修工事の入札がかぶったから欠席もやむなしと言っただけだ。今月は何もないじゃな

いか」

「資料はさきほどお渡ししました。館長は報告に付き添いが必要なんですか？」

「前の副館長は御前会議に毎回出席していたと聞いている」

ラッセルは平然とした顔で言ったが、ルークは眉を動かもしなかった。

「それは前館長が高齢で、ご病気のことが多かったからです」

「二人で出席していたこともある。議事録を調べた」

「まさかと思いますが、決裁書類のサインもせず書庫にこもっていたのはそのためですか？」

ルークの眸は珍しい色をしている。たとえるなら満月の夜の色、青みがかった水晶を透かしてみつめる闇の色である。そんな眸にみつめられ、桜色の唇で甘い言葉をささやかれたあかつきには、誰でも彼の思うままになるにちがいない。ルークの美貌は初対面の人間にそう思わせるようなたぐいのものだ。しかしラッセルを前にすると、それは逆の意味で危険なものとなる。

とげとげしい口調に加え、凍えそうな冷たさを帯びたルークの眸は凶器さながらだ。物陰にいるにもかかわらず職員は首をすくめたが、館長のラッセルはひるまなかった。

「他の用事のついでだ。それに決裁などすぐ終わる」

間髪容れずルークは答えた。

「ではこの件は決裁が終わってからにしましょう」

「待て」

ラッセルは話を終わらせまいとするように、ルークに半歩近づいた。

「御前会議だけじゃない。副館長は……副館長補佐の時代から、王立図書館を出ることがめつたにないと聞いた。なぜだ？ 外に出たくない理由でもあるのか？」

ルークは質問の意味がわからないという目つきをした。

「いいえ？ 必要性を感じないだけです。住まいは図書館の敷地につながっていますし、食事も図書館ですませられますので」

「まるで引きこもりじゃないか。運動不足は健康に悪いぞ」

「私の健康について、館長に心配してもらうには及びません」

きっぱりとそう告げて、ルークはさっとときびすを返した。ラッセルは琥珀色の目に焦りを浮かべて引き留めようと腕を伸ばしかけたが、黒髪に触れる寸前にその手を下ろした。

ルークの背中に回廊の奥へ消えると、中庭には安堵のため息がもれた。館長のラッセルではなく、物陰で息を殺して見守っていた職員たちのため息である。ラッセルはというと、その場に突っ立ったまま腕を組み、ルークがいなくなった回廊の奥をみつめて小声でぼやいている。

「……まったく、副館長はつれないな」

「ちがうアップローチを試した方がいいんじゃないか」

そのぼやきに答えるように、ひとりの紳士が悠々とした足取りで中庭にあらわれて、残念そうな目つきでラッセルを見やった。

「ハーバート！ どこから聞いていたんだ」

男はハーバート・ローレンス。何よりも読書を愛し、社交行事もすっぱかしては朝から晩まで図

書館で本を読んでいることで有名な貴族である。たまたま読書の息抜きに中庭へ出てきて、ラッセルとルークの対決を目撃したのだ。宮廷では変わり者と思われるが、王と王妃の昔からの友人でもあり、ラッセルにとっては叔父おじのような存在だった。

「学生時代からルーク・セクストンはおまえに対してそんな調子だそうだが、本当なのか？」

ハーバートは呑気な口調でたずね、ラッセルは顔をしかめた。

「その話、どこで聞いた？」

「おまえの学友が飲み屋で話していた」

「まったく、あいつら……」

ラッセルは王家の第七王子で、フルネームは「ラッセル・S・ウィンスレット・アルドレイク」という長たらしいものだ。とはいえ、末子だからよほどのことでもないかぎり王位継承とは無縁だと、幼いころから自覚している。それもあってか、身分を鼻にかけないおおらかさと気さくな性格ゆえに、宮廷貴族から厩番うまやばんまで幅広く友人知人がいた。ことに大学は身分のちがいを超えて学問や交友にいそしむ場所でもあり、ラッセルは良い意味（剣の腕前）でも悪い意味（悪友との大騒ぎ）でも目立ちながら学業をおさめた。

一方、ルーク・セクストンはラッセルより二歳年上である。ハーバートが学友から聞き出した通り、ラッセルに面と向かったときのルークの冷淡な口調は、学生時代から続いているものだ。

ちなみに、ルークとの初対面、これはラッセルにとって、あまり思い出したいくない出来事だった。いや、正確には思い出したいくないのではなく、思い出すのはいろいろな意味で避けた方がいいと、

ラッセル自身が思っているせいだが――

しかし、ハーバートはラッセルの胸中をよぎった思いなど知ったことではなかった。

「たしかに、大学時代のおまえを知っているのなら、つきあうには軽薄すぎると思うのも無理はないか」

ラッセルは焦った声で言い返した。

「ハーバート、誤解を生む表現はやめてくれないか。俺はルークにつきあってくれなんて言ったことはない。ただ俺は、館長と副館長という役職にふさわしい接し方をしようとしているだけなんだ。それともたいしたことじゃない、御前会議に同伴する程度の話だ」

「同伴って言葉はいやらしいな」

「やめてくれよ。たしかにルークは初対面の印象を引きずってるのかもしれないが、お互いもう学生でもない」

「いったい初対面で何をしたんだ、ラッセル？」

「それはその……」

ラッセルは口ごもった。あの日ラッセルと一緒にいた学友もすべてを知っているわけではなく、第一、今さら蒸し返すことではなかった。これはラッセルの名誉ではなく、ルークの名誉のためだ。「なんだ？ そんな顔をするなんて、さては酔いつぶれてあの美人の膝にゲロを吐きでもしたのか？」

ハーバートの言ったことはまったく当たっていなかったが、ラッセルはしぶしぶうなずいた。

「そんなところだ」

「軽蔑されて当然だな」

「あのな、俺のせいじゃない。俺も巻きこまれたんだ」

「ほう？」

「とにかく俺がルークに迷惑をかけたのはあのときだけだ。あのときはきちんと謝罪したし、ルークも気にしていないと言っていたし、大学を卒業したあと、ルークが副館長の補佐だと知ってから特に気をつけてきたつもり……なんだが……」

「ほう……」

ハーバートの眸がキラッと光った。

「だからせめて職務のときくらいは横にいたいのに、ちつとも振り向いてくれないと？」

「そんなんじゃない」

思わず強くそう言うってから、ラッセルはあわてて声を低くした。

「そんなことじゃないって！俺はルークとその……感じよく話をしたいと思ってるんだ。なのにすぐ――おい、ハーバート、面白がってるな？これ以上余計なことを言うなら館長権限で出禁にするぞ」

「わかったわかった。まあ、がんばるといい」

ハーバートはクスクス笑ってラッセルの肩を叩き、ラッセルは顔をしかめながらその手を払った。子供のころから自分を知っている年長の友人とは厄介なものである。ともすれば自分の心を見透か

すようなことを言う。



さて、そうやってラッセルがハーバートにからかわれていたとき、ルークが何をしていたかといえ

ば――

「十五、十六、十七、十八……」
副館長の執務室に閉じこもり、デスクと書類棚の前を行ったり来たりしながら自分の歩数を数えていた。

「――一周が十八歩。ということは十周やそこらでは、さほど歩いたことにならないのか……」

ルークは黒髪をかき上げて物憂げな吐息をついた。

「たしかに健康に悪い」

――実はこの日、ラッセルが何気なく言った「引きこもり」や「健康に悪い」という言葉は、当人が想像するよりもずっと強く、ルークの心に響いていたのだった。だから、ルークは思い切って〈竜のヤドリギ〉へ出かけ、ドラゴンを連れ帰ったのである。

3 ドラゴンはなぜ健康にいいのか

さて、ドラゴンを肩に乗せて無事出勤を果たしたルークは、街路や中庭で人々に動揺を引き起こしたことにまったく気づかないまま、静かに執務室のドアを閉めた。

「朝早くから散歩するのは、案外気分がいいものだね、リリ」

ささやくとドラゴンの翼の先が首筋をくすぐる。ルークは実に誇らしい気分だった。出勤時間を大幅に早め、官舎から大学街に出てぐると歩き、戻ってきただけのことだが、早朝のさわやかな空気と、人生初のドラゴン散歩が成功したという思いで実に達成感がある。リリと名付けたドラゴンも上機嫌だった。街路を行くときはルークの頭上をパタパタと可愛らしく羽ばたいていたし、手や肩にもおとなしく乗ってくれる。

ルークがドラゴンショップ〈竜のヤドリギ〉からリリを連れ帰ったのは二日前の夜だった。家に連れ帰ったあととはしばらく籠から出さないようにと店主が言ったので、リリは今朝まで寝室に置いた籠の中にいた。

店主いわく「ドラゴンは慣れるまでは途中で逃げ出そうとしますが、この籠に入れたまま二日同じ部屋で眠り、餌と水を二回やれば、普通は懐きます。飼い主のオーラを覚えますからね」とのこと。

ちなみにそのとき、細かいことが気になるルークは「普通は、とは？」と聞き返した。すると店

主は「たまにえり好みが激しいのがいるんですよ。ああ、それとか」と言つて、隅の籠に入れられた空色の羽根のドラゴンを指さした。

「籠から出したとたん逃げ出そうとするつて、三回も戻ってきたんですよ。見た目はいいけどお勧めしません」

だが、ルークは店主の声を聞いていなかった。空色の羽根のドラゴンが籠のすきまから首を伸ばし、ルークをみつめていたからだ。

それが今ルークの肩にとまっているリリである。店主は何度も「お勧めしない」と言つたが、ルークはひと目でリリに惚れこんでしまった。「このドラゴンがいい」と引かないルークを店主は呆れた目で見て、しまいに承知したのだつた。

「わかりました。これは札付きのドラゴンですから、サブスク中に何かあつたら必ず連絡してください」

しかし、今のところリリはなんの問題も起こしていない。今も肩にとまつたまま、ルークの仕事場を見回している。

副館長の執務室は館長室の半分以上の広さで、簡素なしつらえである。ひとつの壁は大きな書類棚で占められ、もうひとつの壁にある窓の前にはデスク。書類棚と向かいあつた壁には別のドアがあつて、館長の従僕が控える小部屋に続いているが、現館長のラッセルは従僕を使わず、小部屋には大きな長椅子が置いてあるだけだつた。昼寝に使っているらしいとルークは見当をつけていた。

小部屋のもうひとつのドアを開ければ、いちいち廊下に出ずとも館長室へ行くことができた。鍵

はついておらず、それどころか前任者の時代はいつも開けっ放しだつた。しかし、ルークが副館長になつてからは一度も開けたことがない。

パタパタ。

翼の音がして、リリが肩の上から飛び立つ。あつと思つてルークが見上げると、一度天井の近くまで舞い上がったあと、部屋をぐるりと一周してふたたびデスクへ舞い降りた。

「鳥籠を吊るすから、そこでじつとしていなさい」とルークは言つた。

リリはデスクの上で小首をかしげた。藍色の目の中で白い星がくるりと回つた。まるで「どうして？」とたずねているようだ。

ルークは書類棚の横から脚立をひっぱり出した。

「リリだつて、館長みたいに遊び疲れたら籠で昼寝したいだろう？」

ルークは脚立にのぼり、天井から下がる鎖（本来はランプを吊り下げるためのもの）に鳥籠をぶら下げた。籠の戸には細い鎖がついているから、下から引くだけで開け閉めできる。

この籠も〈竜のヤドリギ〉から借りたものだ。サブスクの料金には日中用と睡眠用のふたつの籠のレンタル料も含まれている。今ルークが吊り下げたのは日中用の籠だ。

「ほら、おいで。この籠は昼間専用だから、真つ暗にはならないよ」

ルークは脚立に乗つたままりリリを呼んだ。ドラゴンは空色の翼をパタパタさせてふたたびデスクから舞い上がったが、見定めるように籠の周囲を飛び回るだけで、中に入ろうとはしない。

「戸は閉めないから、一度入つて」

ルークはリリの方へ腕を伸ばした。そうしながら、脚立にのぼるのもひさしぶりだと思った。去年までは副館長の補佐役として雑用に駆け回ったものだし、重い本を持って書架の梯子を昇り降りすることもしょっちゅうだった。

ところが今は一日中、執務室にこもって計画書や報告書を作成するばかり。夕刻に仕事から解放されると、今度は書庫にこもって読書するばかり。だからラッセルに「引きこもり」と呼ばれてしまったにちがいないが――

「リリ、おいで！」

空色のドラゴンが飛んでくると、ルークは蕩けるような微笑みを浮かべた。

ドラゴンを飼うのは健康によい。これは〈竜のヤドリギ〉が大繁盛しているもうひとつの理由である。

〈竜のヤドリギ〉の主要顧客である貴族は夜更かし朝寝坊が多く、官吏は運動不足になりがちで、どちらも不摂生と言える。しかしドラゴンを飼えば、一日一度は外に連れ出して散歩をしなくてはいけない。朝露を飲ませようと思ったら早起きも必要だ。

ドラゴンは餌を与え、散歩に連れ出し、朝露を飲ませてくれる人間を主人として懐くから、従僕にまかせているとパーティで赤っ恥をかくことになる。サプスクをはじめると、みな最初はしぶしぶ散歩に出る。ところが、パタパタと空を飛ぶドラゴンを撫でたりなだめたりしているうち、散歩自体が楽しくなつて、やがて運動習慣が身についてくる。

これだけでも十分健康に良さそうだが、ドラゴン飼育の副効果は他にもあった。

ドラゴンに毎日餌をやっていると、食が細かった者はなぜかよく食べられるようになり、大食していた者は逆に食事が減って体調がよくなったとか、つねに不機嫌で周囲にあたりちらしていた気難し屋が、ドラゴンを飼いはじめて性格が丸くなったとか、引つ込み思案で人と目を合わせることもできなかった令嬢が、ドラゴンを連れていけば社交の場でうまくふるまえるようになったとか。これらは王国新聞にも大きく取り上げられたので、上流階級の流行になど興味を持たなかったルークも、胡桃通りのはずれにある〈竜のヤドリギ〉を知ることになったのだった。

「いいことづくめですが、これはドラゴンが精霊族だからでしょうか？」

新聞記事では、記者は〈竜のヤドリギ〉の店主にこんな質問をしていたが、店主はあいまいに笑い返しただけである。記者はさらにこんな質問もした。

「もうひとつお聞きしたいのですが、この店のドラゴンはこちらで繁殖したのでしょうか？ 王領の森以外でドラゴンを見つけるのは大変難しいと言われていますが……」

「ああ、もちろん秘策があります。教えられませんが」

企業秘密というわけである。

〈竜のヤドリギ〉には他にも謎めいた点があったが、リリを飼いはじめたばかりのルークはまったく気に留めなかった。

リリは脚立のてっぺんにいるルークのところまで来ると、おとなしく籠の中に入ってしまった。自分の言葉が通じているのを実感して、ルークの唇はまたほころんだ。籠の戸に頬をよせてのぞきこみ、中を検分するようにつついているリリをみつめる。

「けっこう広いだろう？ 止まり木もある。昼間はリリが好きに出入りできるように、籠の戸は開けて——」

そのときだった。続き部屋のドアが勢いよく叩かれた。

「ルーク、中にいるか？」

ルークはハッと肩を震わせたが、発せられた声は冷静だった。

「館長、お待ちを」

「入っていいか？」

「お待ちくだ——」

声こそ冷静だったものの、脚立を降りるときはあわてていた。ルークはよろめいて段を踏み外しそうになった。すると、いきなりリリが籠から飛び出し、執務室に笛のような音が響いた。

ピーッ！

え？ 今のはまさかりリの鳴き声？ ドラゴンは鳴かないのではなかったか——脚立から転がり

落ちようとしているまさにその一瞬、ルークの頭をよぎったのはそんな考えである。

「ルーク！」

同時に続き部屋の方で声があがって、バタンと大きな音が響いた。そのときにはもう、ルークは脚立から足を踏み外していた。床まで転がり落ちるかと思いきや、がっしりして温もりのある何かがルークの体を支えている。笛のような音もやんでいた。太い腕がルークの背中に回されているのだ。

それが誰の腕なのかは、顔を見るまでもなくわかった。

「か、館長？」

ラッセルがほっとした顔で「ドラゴンが鳴いたから何かあったかと——」と言いかけたが、ルークは最後まで聞かなかった。

「お、おい！」

「大丈夫ですから！」

ふだんは決して出さないような声で叫びながらルークは腕を振り回した。肘がビシッとどこかに決まり、小さなうめき声とともにラッセルの腕がゆるむ。ハッとして声のする方を見ると、ルークの肘はラッセルのあごに命中していた。

「……痛っ……」

パタパタッと羽ばたきの音がして、ラッセルの頭に空色の翼がかぶさった。

「お、おい！ まて、つつくなよ！ 俺は何も——」

蜜色の髪の中からドラゴンの首が伸びた。藍色の目の中で白い星がきらめき、翼が広がる。

まさかと思うが、リリは自分を助けようとしているのだろうか、とルークは思った。ラッセルは自分を助けようとしてくれたのだから完全に誤解である。ルークはラッセルから後ずさりながら叫んだ。

「リリ、籠に戻って！」

「早くどけ——痛っ」

ラッセルがうめく。

「こら、俺の髪を抜くな！ 爪をひっこめろ！」

「リリ、私は大丈夫だから！ やめなさい」

今度こそドラゴンは宙に舞い上がったが、鉤爪にからまったラッセルの髪が千切れる無慈悲な音も響いた。空色の羽根がパタパタと籠の中に飛びこんでしまうと、ルークは鎖を引いて籠の戸を閉めた。

背後で大きなため息が聞こえ、ルークはゆっくりと振り向いた。

「館長、申し訳ありません。その、脚立から落ちそうになりました」

ラッセルは腰を伸ばし、ドラゴンの鉤爪でばさばさになった髪のを撫でつけると、コホンと咳払いをした。

「その、用があつて続き部屋を通ろうとしたらドラゴンが鳴いたから……何事もなくてよかった」

「あの音ですか？ マニュアルによれば、ドラゴンは鳴かないとのことですが」

そう言いながらルークはラッセルの琥珀色の眸からそつと目線をずらした。ルーク自身にも理由がさっぱりわからないのだが、なぜかこの眸に昔から——そう、学生時代から困惑させられてきたのである。もちろんラッセルはそんなことは知らないし、ルークも知られたくなかった。

「いや？ 仲間や飼い主に危機が迫ったときは、鳴いて警告を出すこともある」

ラッセルは答えながら無造作に両手を払う。するとリリにむしられた髪のがらはらと床に落ちた。ルークはかすかに眉をあげた。

「お詳しいですね。館長もドラゴンを飼われているのですか？」

「いや、ただの知識だ。王家は昔からドラゴンと関わりが深い」

「なるほど。本当に申し訳ありませんでした。二度と館長を襲わないよう、リリに教えます」

ルークはラッセルと目を合わせないようにしながら言った。おかげでラッセルの眸にかすかな落胆がよぎったことにも気づかなかった。

「ああ。よろしく頼む」

「ところで館長、ご用件はなんでしょう」

「用件？」

「私に用があつて来られたのでは？」

「ああ、そうだ。そのはずだが……」

ラッセルはまたコホン、と咳払いをした。

「悪い。度忘れした」

「そうですか。了解しました」

「思い出したら知らせる」

「はい」

「脚立、片付けようか？」

「けっこうです。自分でやれます」

「俺の方が力はある」

「この程度の脚立に苦労しているようでは、図書館の仕事は務まりません——あ」
ルークはふと、そういえば自分もラッセルに言いたいことがあったと思い出した。

「館長」

「なんだ？」

「たしかに最近の私は不健康だったかもしれませんが。明らかに運動不足でした」

「ラッセルの琥珀の眸がとまどったように揺れた。」

「……そ、そうか？」

「しかし今日からはリリがいます。問題は解決するでしょう。リリに朝露をあげるために散歩に出ますし、リリと遊べば運動不足も解消します」

「……なるほど」

「それで館長、私は仕事にかかりたいのですが。ご用件を思い出したらお知らせください」

頭上でカサカサと音がした。ラッセルは上を見上げる。リリが籠の隙間から首を伸ばしている。

「……わかった。そいつも俺が邪魔らしいな」

「はい」

「肯定しなくても」

「申し訳ありません」

「いや。邪魔してすまなかった、副館長」

ラッセルの背中が続き部屋に消えるのをルークはまっすぐ立ったままみつめていた。ドアが閉まったとたん、ふうーと大きなため息が半開きの唇からもれる。細い右手がゆっくりあがり、左胸のあたりをそっと覆った。

「ああ……まだどきどきしている」

頭上の籠からコツコツと音が響いた。リリの鉤爪が底をリズミカルに叩いている。ルークは息を吸って吐き、リリの立てる音に耳を澄ませた。激しく脈打っていた胸がだんだん穏やかになっていく。

図書館職員たちは館長と副館長の仲が悪いことを気にしている。しかしルークとしては、ラッセルが嫌いなわけではなかった。ラッセルとちがい、初対面の日に起きたこともたいして気にしていない。

問題はルークの心ではなく体にあった。ラッセルの琥珀色の眸をのぞきこむと、ルークの心臓はなぜかドキドキ脈打つのである。おまけに、体の中心がおかしな感じで疼いて、かっとなくなるのだ。

最初にラッセルを目撃したときからルークはこの現象に悩まされている。それはラッセルが大学へ入学した年の学寮対抗戦の最中だった。自分でも理由がわからないから、対処もできなくて困っている。

ラッセルに面と向かうたび、体の熱が心に影響するのか、ルークからは冷静な思考が失われてしまう。体の衝動を抑えた反動が出るのか、つっけんどんな受け答えをしてしまうこともあるし、喧嘩腰になってしまうこともある。

ルークは内心、それを恥ずかしいことだと思っていた。どうしてラッセルに対してのみ、自分はそんなふうになってしまうのか？ いったい何が起きているのか？

図書館で調べてみたこともあるが、答えは見つからなかった。

ルークは左胸にあてた手を離した。

〈竜のヤドリギ〉でリリを見つける前、ルークはラッセルに「私の健康について、館長に心配してもらうには及びません」と答えた。あれはルークの本音ではなかった。しかし本心をラッセルに告げるわけにはいかない。

——私の健康に悪いのはきみだ。

そんなこと、言えるわけがない。

5 ルーク・セクストンの生い立ちについて

ところで、ドラゴンのリリを迎える前のルークの生活は、誰が見ても美しいその容姿に似合わず、華やかさのかけらもない、ひっそりして孤独なものだった。

人によつてはこれを奇妙だと思いかもしれない。何しろルークの容貌は、高位貴族の庇護のもとで指一本動かすことのない生活をしたり、自分の思うままに他人をあやつったり、そんなことも不可能ではないものだったからだ。

しかし、ルークの頭にそんな考えが浮かんだことは一度もなかった。というより、ルークは自分の外見が他人にそんな効果を及ぼすと考えたことがついぞなかったのである。それは彼のやや特殊な出生と、育った環境の影響にちがいがなかった。

ルーク・セクストンは父親の旅先で生まれた子供で、母親を知らない。父親のロバート・セクストンは王立大学の教授で、長い休暇旅行から王都に戻ったとき、赤ん坊のルークを荷物と一緒に連れ帰ったのだ。

セクストン教授は学者として高く評価されていたが、ときおり突拍子もない行動で周囲を驚かすことがあった。ルークを連れ帰ったときもそうで、母親について人々に聞かれても自分の子だと言うばかり。

人々はあれこれ噂したが、父は詮索の目などものとしなかった。ルークが乳飲み子のあいだこそ乳母の手を借りたが、そのころもルークのゆりかごは父の書斎におかれていた。

乳飲み子のころからルークは天使のように可愛らしく美しかったが、子守歌は難解な学術書を読み上げる父の声だった。当時の大学は学生が教授を訪ねて講義を受ける形式で、ルークは指導学生の「いないいないばあ」にキャッキヤと笑いながら成長した。

ルークのおもちゃは書き損じの紙や鳥の羽（いずれ羽ペンになるもの）で、物心ついたころには王立図書館の中庭で遊んでいた。教員の住居は王立図書館と隣りあっており、小さな門をくぐれば中庭に入れたのである。

当時の王立図書館の館長と副館長も、赤子のころからルークを知っていた。ちなみに、この二人はラッセルとルークの前任者で、館長はラッセルの大叔父である。

天使のような赤ん坊はすくすく育ち、やがて人の目を見張らせる美少年になった。しかし、館長も副館長も教授である父も、学問の成果を出すために必死な学生たちも、ルークの聡明さを心から愛したのとは対照的に、ルークの容姿に特段の関心を示さなかった。

ルークは大学付属の幼年学校に通い、中等部へ進学した。そのころにはルークの遊び場は王立図書館の中庭から図書館そのものになっていた。

ルークの環境が少々変わったのは、高等部へ進学する目前のことである。父のロバートが急死したのだ。真夜中、書斎の書類棚にかけられた梯子の上で発作を起こし、転がり落ちて帰らぬ人となった。

学生たちに愛された教授が亡くなったあとルークの後見人になったのは、王立図書館の副館長である。ルークは高等部の学寮に入ったが、週末は当時副館長が暮らしていた、図書館職員の官舎で過ごした。

官舎は王立図書館の敷地内にあったから、いまやルークは図書館に行くために門をくぐる必要もなくなった。大学では書誌学を専攻し、官吏の試験を優秀な成績で突破して、図書館職員になったあとは副館長の補佐を務めた。

つまりルーク・セクストンは自他ともに認める「図書館の子」だった。このまま年をとればやがて「図書館の主」と呼ばれたであろう。ちなみに職員の一部は、彼をひそかに「図書館のいとし子」と呼んでいる。

大学を出てからもルークは図書館の敷地内にある官舎で一人暮らしを続けている。毎日の仕事を終えると職員用食堂で簡単な夕食をすませ、そのあとは書庫にこもって調べものや読書にふけるのが常だった。官舎に戻るのは夜も遅くなってから。朝の寝起きはよいとはいえず、ぼうつとしたまま身支度をすませ、朝食は官舎の出口で売っているドーナツとコーヒーを執務室に持ちこんでまする、といった具合である。

普通ならこのような生活スタイルは周囲にわびしいと思われるものだが、ルークの場合はそうならなかった。執務室でドーナツを頬張る姿もさまになるのは、常人ならざる美貌の持ち主ならではの。

副館長になってからもルークの生活が変わることはなかった。ひとつ特筆すべきことがあるなら、

館長に就任したラッセルの誘いをすべて断ったことくらいか。

以上がドラゴンを飼いはじめる前のルークの人生だった。しかし、ドラゴンのリリによって、その毎日は劇的な変化をとげたのだった。

6 ルークとリリのていねいな暮らし

やっと夜が明けたころ、サラサラ、パタパタという音を聞いてルークは目覚める。以前は目覚まし時計を三つ鳴らしても出勤時刻ぎりぎりまで眠りこんでいたものだが、今はドラゴンのリリがルークの目覚ましなのだ。ドラゴンの翼がこすれあったり、鉤爪が籠の底をひっかいたりする音を聞くと、なぜかルークの目はぱちりと開く。

「おはよう、リリ」

サブスクにセットされているドラゴンの籠（睡眠用）は、執務室にぶら下げている日中用の籠よりも頑丈なつくりで、まったく優雅さが無い。寝る前にかけてカバーを外すとリリは檻に入れられているように見えるので、ルークはこの籠が好きになれなかった。

ひよっとしたらリリも同じ思いなのかもしれない。

ルークが籠の戸を開けたとたん、リリはルークの胸のあたりに飛んできて、それから肩によじのぼる。身支度をはじめたルークの首筋に頭をスリスリするが、顔を洗う水がかかりそうになると、

パツと飛び立つ。

「朝ごはんの用意をしようか」

ルークは身支度をすませると、官舎の入口に届けられた朝食セットを取りに行く。これは〈竜のヤドリギ〉のサブスクオプションで、新鮮な卵とミルクと焼きたてパンが毎朝届くのだ。少々割高ではあるが、これまで食事のほとんどを勤務先の食堂ですませてきたルークには便利なサービスだった。

リリは新鮮な卵にはやくも興奮している。ルークは小さなキッチンへ行くと、フライパンをコンロにかけて目玉焼きを作りはじめた。卵の殻はリリの朝食になるので脇によけておく。

本当のことを言えば、ルークは目玉焼きよりもオムレツが好きだった。ところが初日に挑戦したら、新鮮な鶏卵はルークがオムレツとして思い描いていたもの——ふんわりした黄色の半月で、割った中身は半熟とろとろ——とはかけ離れた物体に変わってしまった。そこで翌日からは目玉焼きに取り組んでいる。こちらはなんとか目玉焼きのイメージに近いものになる。

ちなみに、リリはゆで卵の殻には見向きもしない。

目玉焼き、バターつきパン、ミルクと紅茶。

リリはとくにテーブルに——ルークの席の向かいに——いる。ルークが卵の殻を並べて「朝ごはんだ」と言うと、藍色の目の中で白い星がきらきら輝く。

ドラゴンを飼う前のルークは、こんな朝を想像できたのだろうか！

朝食をすませると、ルークはリリを連れて官舎を出る。出勤時刻まで十分な余裕があるので、

ルークはリリと一緒に大学街を歩き回ってから、図書館の方へ行く。早朝の大学街はまだ人通りが少なく、空気はさわやかで、酔っぱらった学生もいない。

リリはルークを先導するように飛んでいき、ルークがこれまで足を踏み入れたことのなかった路地にも入りこんでいく。リリはドラゴン特有の感覚で、木立に囲まれたベンチや朝露に濡れた花壇を見つけ出し、ルークはリリがデザートを舐めているあいだ、ベンチで一休みする。

ドラゴンをサブスクしてから、ルークの血色は少しよくなり、夜も以前より熟睡できるようになった。そんなルークの変化は、王立図書館を中心とした大学街の早朝にも影響を及ぼした。

「どうしたの、ずいぶん早起きじゃないの。試験前でもないのに」

「ははは、早起きはいいことがあるってやつとわかったんです」

これは学寮近くのコーヒースタンドの前で交わされた会話である。コーヒーを片手に返事をしたのは、これまでは試験前でもぎりぎり講義室に駆けこんでいた学生だ。

「ルークさん見物ならそつじやない、あっちを通るよ」

視線が定まらない学生にコーヒースタンドの亭主はあつさり教えた。同様の学生が何人もコーヒーを買っていったからだ。

「ちょ、ちょっとここにいいですか？」

「いいけど、次の客が来るまでだ。客が来たらあっちへ行きなさい」

学生は指さされた方向を見た。街路樹の陰に数人が固まって立っている。

「まさか彼らも？」

コーヒースタンドの亭主は満面の笑みで答えた。

「ルークさんがドラゴンを飼ってからというもの、客が増えてな。ありがたいありがたい」

なんとのことだ。学生がそう思ったのも一瞬のことだった。誰かが「あつ」と小さく叫んだからだ。

「来た！」

「リリちゃんが見えた！」

「はいはい、次の客だ。あんたもあっちへ行つて」

亭主は学生へ鷹揚^{おうよう}に手を振りながら、やはり街路の先へ目を凝らした。パタパタと宙を飛ぶドラゴンの下でルークの黒髪がなびいている。あいかわらず誰が見ても美しい男だが、ドラゴン連れは今ほさらに神秘的なオーラが加わっている。

亭主は内心ほくそえんだ。ドラゴンと散歩するルークをひと目見ようと、これまで遅刻ぎりぎりだった学生や職員は早起きするようになり、コーヒースタンドも繁盛しているからだ。

晴れた昼休みには、ルークはリリと一緒に中庭で日光浴をした。その姿は勉強や調べものに疲れた図書館利用者の目を和ませたこともあり、これまで試験前以外は図書館に近寄らなかった学生も足を運ぶようになった。

一日の仕事が終わると、ルークはリリとともに官舎へ帰っていく。職員用食堂はリリと一緒に入

れないので、大学街の惣菜屋で夕食を買って帰るのが日課になった。つまり運のいい者は、早朝だけでなく夕方も、大学街でドラゴンを連れたルークを目撃できるのだ。

夜、ルークが眠るときには、リリはカバーをかけた籠に入れられる。〈竜のヤドリギ〉のマニユアルは、夜中にドラゴンを部屋に放すことを禁じていた。しばらくのあいだ籠からは羽根がこすれるサラサラ、パタパタという音や、鉤爪でひっかく音が響いているが、やがて静かになる。ルークがカバーをめくってみると、リリは首をまるめてびくりとも動かない。

眠っていてもリリは可愛いらしかった。ドラゴンも夢を見るのだろうか。

そして夜明けが来ると、リリが羽根をパタパタしてルークを起こし、また同じような一日がはじまる。同じような、といっても、リリと一緒に暮らしては確実にルークの生活の質を上げていた。

それにしても、こんなにもドラゴンにのめりこんでしまうとは。

〈竜のヤドリギ〉に足を踏み入れる前はまったく予想しなかったことである。しかし今あらためて考えると、あの店でリリと目を合わせた瞬間、ルークはずっと前に失くして忘れていたものを見つけて出したような、奇妙な衝撃を受けたのだった。

そういえばリリという名前も、ルークが考えたというより、リリの藍色の目をみつめているあいだに自然に思い浮かんできたのではなかったか。

〈竜のヤドリギ〉のマニユアルには、ドラゴンに名前をつけても意味がない、と書いてある。店主はその理由として、精霊族のドラゴンは人間がつけた名前など覚ええないし、反応もしないと言ったのだが、ルークにはとても信じられなかった。

ルークが〈竜のヤドリギ〉からリリを連れ帰ったのは秋の初めのことである。街路樹の緑はまだ鮮やかで、汗ばむような暑い日もあった。毎朝リリと一緒に散歩するうちに、ルークは日一日と季節がうつるのを肌で感じられるようになってきた。図書館にこもりきりの日常ではありえなかったことである。

コーヒースタンドの亭主をはじめとした大学街や図書館の人々は、ルークとリリの邪魔をしないよう、遠くからそと愛^めでていた。こうして、ルークがドラゴンのサブスクをはじめてから、王立図書館や大学街の人々は——たいていの人は——幸せになった。

第二章 ドラゴンの卵

1 王の末息子、ラッセルの憂鬱

アルドレイク王国の王立図書館には、本以外を目当てとする人間も訪れる。

「セクストン副館長、やっとお会いできて嬉しい。ずっと会いたかったのにこれまで機会を作れなかった」

館長室に入ってきたルークにテレンス公爵夫人クララが言った。まるで男子学生のような言葉遣いだが、見た目は美しいドレス姿の貴婦人だ。レースの扇で口元を隠し、同色のレースを重ねた豪華なドレスをまとっている。

ラッセルは館長のデスクの前に立ち、内心の落ちつかなさを隠して二人の対面を見守っていた。

クララは現王の最初の王女、つまりラッセルの姉である。ラッセルにとってクララは決して頭の上がない姉だった。ちなみに、夫のテレンス公爵も同様と聞いている。

「こちらこそ、お会いできて光栄に存じます」

ルークは緊張しているのか、クララに対する表情は強張^{こわば}つてぎこちない。しかし、それも彼の美

貌を損なうことはなく、むしろ神秘的な雰囲気醸し出している。

ラッセルは無意識にみとれていた自分にハッとして、あわてて顔をひきしめた。

「大叔父は学者肌だったからなんの違和感もなかったが、弟は迷惑をかけているのではないかと？ 王の末子が館長になる決まりといっても、ラッセルはどちらかといえば——」

クララは眉をひそめて言葉を探した。

「そう、筋肉で考えるたぐいの人間だからな」

「姉上！」

ラッセルは思わず声をあげたが、ルークの顔はびくりとも動かなかったし、ラッセルの方を見ようともしない。しかし意外にも、その後ルークの口から出たのは褒め言葉だった。少なくともラッセルはそう受け取った。

「いいえ、そんなことはありません。館長の決断力や外向的な対応にいつも感心しています」

ルークの返事にクララはほう、という表情になった。

「筋肉で考える人間は決断が早かったりするからな」

「なるほど、そういうことでしょうか」

——いや、特に褒められたわけではなさそうである。

「姉上——」

ラッセルは口を挟もうとしたが、クララは気づかなかったように話を続けている。

「ラッセルは子供のころから何かを決めて実行するのだけは早いんだ」

「優柔不断では館長は務まりませんから、その点は適任といえます」

「それはよかった。要するにあいつは体の方が先に動く性質なのさ」

ラッセルは会話に加わるのをあきらめた。昔からこの姉の話にうまく割りこめた試しがない上、クララの相手はルークである。

「ところでルーク、と呼んでもいいだろうか」

クララは優雅な仕草で扇をくるりと回した。

「はい、もちろん」

「王立図書館の館長は基本的に終身職だ。前の館長は高齢で退いたが、私やラッセルには大叔父にあたる方だからな」

「はい。前館長には私もお世話になっています。前副館長の補佐時代には時々お会いしました」

「ああ。この図書館では、歴代の副館長は館長とつねに仲良く職務に取り組んできたものだ。まあ今回は不束者の弟でまことに申し訳ないが、よろしく頼む。アルドレイク王国の図書館は我が国が古代帝国から継承した伝統で、財産でもあるからな」

クララの言葉を聞くうちにルークの表情が少し和らいだ。その眸にクララの真剣な表情が映る。

「ええ、父からも同じ話を聞いています」

「ロバート・セクストン教授だろう」

「ご存知なのですね」

「もちろん、若いころ一度だけ王領の近くでお会いしたこともある。休暇であたりに来られて

いたんだ。お茶に招いて学説を拝聴したよ。古代帝国が分裂する中、アルドレイク王国の祖が精霊族の加護を得た理由についての話だった」

ルークは意外そうな目つきになった。

「父にそのような学説が？ 知りませんでした。どんな内容でしょうか？」

クララは扇を揺らし、小さく肩をすくめた。

「悪いな、詳しい話は忘れてしまった。ただ教授の話を聞いて、王家に伝わるドラゴンの逸話に納得したことは覚えているんだ。ドラゴンといえば、ルークもドラゴンを飼いはじめたと聞いたが？」

「姉上」

今度こそラッセルは口を挟んだ。

「副館長と話せて嬉しいのはわかるが、彼は忙しいんだ。俺も忙しい。姉上にドラゴンを見せる暇も、散歩につきあう暇もない」

クララはラッセルがそこにいることに初めて気づいたような顔をした。むろんわざとである。

「何を言ってる。おまえのドラゴンじゃないくせに」

「ああ、副館長のドラゴンだ。しかし、副館長のドラゴンは図書館のドラゴンも同然だから、館長の俺にも口出する権利はある」

「弟よ、堂々と詭弁を吐くな」

「姉上、詭弁は堂々と弄するものだ」

微妙な空気が漂ったそのとき、館長室のドアがこんこん、とノックされた。

「ご来客中に申し訳ありません。そちらに副館長はいらっしゃいますか？」
ルークがくると背中を向けてドアの方へ行った。呼びに来た職員に耳打ちされて、またラッセルの方を向く。

一瞬びたりと視線が合った。青い月夜の色をした眸を正面から見てしまい、ラッセルは心臓を鷲掴みにされた気分になった。そして二人は同時に視線をそらした。

「申し訳ありません」

先に立ち直ったのはルークだった。

「至急の用事ができましたのでこれで失礼いたします。公爵夫人、またお目にかかる機会がありましたら何卒よろしくお願いいたします」

クララは鷹揚に扇を振った。

「いや、ありがとう。今日は話せて嬉しかった」

ルークは一礼して館長室を出ていった。ドアが閉まったとたん、クララの持っていた扇がデスクへ飛んでいき、ラッセルはあわててそれを受けとめた。

クララはわざとらしく両手を広げてあきれ顔をしている。およそ貴婦人らしからぬ仕草である。

「噂通り凄まじい美人だな！ しかしおまえたち、どうしてもっと近寄らない。大叔父上と前の副館長はいつもべつたりくつついていたと聞くぞ！ 膝に乗りそうな雰囲気だったと」

いったい何を言っているのかと、ラッセルは小さなため息をついた。

「姉上、昼間からそういう冗談はよしてくれ。それに大叔父上とちがつて、俺とルークは恋人でも伴侶でもない」

クララはきょとんとした目つきになった。

「え？ ちがうのか？」

「……当たり前だろう。だいたい歴代の館長と副館長はつねに仲良くやってきたって、あれはなんだ」

「そういうものだからだ。王家の伝統だぞ。おまえたちは絶対にうまくいく」

「は？」

「いやいや、まさか。かつて学寮仲間に仕掛けられた悪ふざけの顛末がラッセルの脳裏をよぎったが、クララにそれがわかるはずもない。」

「しっかりしろ、王の末息子」

クララはラッセルの複雑な胸のうちにまるでかまわず、無慈悲に弟を叱咤した。

「彼は図書館の申し子と呼ばれているそうじゃないか」

「ちがう、いとし子だ」

「似たようなものだ。筋肉頼みのおまえにあれ以上の相手は望めない。おまえだってそう思っているんだろう？」

「姉上」

「やはり来てよかった。おまえに縁談は持ちこまないことにする」